

学校において予防すべき感染症及び出席停止の期間について

第一種	病名	主症状	潜伏期間	感染経路	感染期間等	出席停止期間	備考
第一種	エボラ出血熱、クリミア-コンゴ出血熱、痘そう、南米出血熱、ペスト、マールブルグ病、ラッサ熱、急性灰白髄炎、ジフテリア、重症急性呼吸器症候群（病原体がベータコロナウイルス属SARSコロナウイルスであるものに限る）、中東呼吸器症候群（病原体がベータコロナウイルス属MERSコロナウイルスであるものに限る）及び特定鳥インフルエンザ（感染症法（平成10年法律第114号）第6条第3項第6号に規定する特定鳥インフルエンザをいう。以下において同じ）については、「 治療するまで 」、 出席停止となる 。 ※感染症法 第6条第7項から第9項までに規定する新型インフルエンザ等感染症、指定感染症及び新感染症は、第一種の感染症とみなす。						
	インフルエンザ （特定鳥インフルエンザ 及び新型インフルエンザ等 感染症を除く）	高熱（39～40℃）、倦怠感、頭痛、腰痛、筋肉痛、のどの痛み、咳、鼻汁	平均2日 （1～4日）	飛沫 接触	発熱1日前から3日目を ピークとして7日目頃まで	発症した後（発熱の翌日を1日目として） 5日を経過し、かつ解熱した後2日 （幼児にあっては3日）を経過するまで	肺炎、脳症などの合併症に注意 ※抗ウイルス薬によって早期に解熱した場合も感染力は残るため、発症した後5日を経過するまでは出席停止
	ひやくにちせき 百日咳	連続して止まらない咳が特徴	主に7～10日 （5～21日）	飛沫 接触	咳が出現してから 4週目頃まで	特有の咳が消失するまで、または 5日間の適切な抗菌薬療法が終了 するまで	生後3か月未満の乳児では、呼吸が出来なくなる 発作、脳症などの合併症に注意
	ましん （はしか）	発熱、咳、鼻水、眼の充血、 口内の頬粘膜にコプリック斑 （白い斑点）、赤い発しん	主に8～12日 （7～18日）	空気 飛沫 接触	発熱出現前日から 解熱後3日を経過するまで	解熱した後3日を経過するまで	肺炎、脳炎などの合併症に注意 ※ましん（疑い含む）と診断された場合は、 ただちに、学校（園）に連絡してください。
	りゅうこうせいじかせんえん 流行性耳下腺炎 （おたふくかぜ）	耳下腺・顎下腺・舌下腺などの 腫れ・痛み	主に16～18日 （12～25日）	飛沫 接触	耳下腺などの唾液腺が 腫れる1～2日前から 腫れた後5日目まで	耳下腺、顎下腺、または舌下腺の 腫れが出現した後5日を経過し、 かつ全身状態が良好になるまで	無菌性髄膜炎、難聴などの合併症に注意 患春期以降は、精巣炎、卵巣炎の合併あり
	ふう 風しん （三日はしか）	淡紅色の発しん、発熱、 リンパ節の腫れ（頸部、耳の後ろ）	主に16～18日 （14～23日）	飛沫 接触	発しん出現7日前から 出現後7日目頃まで	発しんが消失するまで	妊娠20週頃までの妊婦がかかると、出生児の脳・耳・ 眼・心臓に先天異常を生じることがある ※風しん（疑い含む）と診断された場合は、 ただちに、学校（園）に連絡してください。
	すいとう 水痘 （みずぼうそう）	赤い発しん→水疱→膿疱（うみ）→ かさぶたの順に変化、 軽い発熱	主に14～16日	空気 飛沫 接触	発しん出現1～2日前から 全ての発しんがかさぶたに なるまで	全ての発しんが、かさぶたに なるまで	肺炎や脳炎などの合併症に注意
	いんとうけつまくわつ 咽頭結膜熱 （プール熱）	高熱（39～40℃）、のどの痛み、 頭痛、食欲不振、 結膜充血、流涙、まぶしがら	2～14日	飛沫 接触	ウイルス排出は、初期数日 が最も多いが、その後、便からは 数か月排出が続くこともある	発熱、咽頭炎、結膜炎などの 主要症状が消退した後2日を 経過するまで	※医師の許可があるまで、プールには入らない ※タオル等を共用しない
	しんがた 新型コロナウイルス 感染症	発熱、のどの痛み、呼吸器症 状等	1～14日	飛沫 接触	発症日の2日前から 発症後7～10日間程度	発症した後5日を経過し、かつ症 状が軽快した後1日を経過するま で	※「症状が軽快」とは、解熱剤を使用せず に解熱し、かつ呼吸器症状が改善傾向に あることを指します。 ※出席停止解除後、発症から10日を 経過するまではマスクの着用が推奨 されます。
	けっかく 結核	咳、たん、微熱、倦怠感	2年以内、 特に6か月以内 （数十年後の 発症もある）	主として 空気	か く とま つ 喀たんの塗抹検査で 陽性の間	病状により医師において 感染のおそれがないと 認められるまで	家族内感染に注意
ずいまくえんきんせいずいまくえん 髄膜炎菌性髄膜炎	発熱、頭痛、意識障害、嘔吐	主に4日以内 （1～10日）	飛沫 接触	有効な治療を開始して 24時間経過するまで	病状により医師において 感染のおそれがないと 認められるまで		
第三種	コレラ	激しい水様性下痢、嘔吐	主に1～3日 （数時間～5日）	経口			
	さいきんせいせきり 細菌性赤痢	発熱、腹痛、しぶりが腹、 膿粘血便、下痢、嘔吐	主に1～3日 （1～7日）	経口			
	ちようかんしゅうけつせいでいぢようきん 腸管出血性大腸菌 感染症（O-157等）	水様下痢便、腹痛、血便	10時間～6日	接 触 経口	便中に菌が排出されて いる間		溶血性尿毒症候群や脳症の合併症に注意
	ちよう 腸チフス	持続する発熱、発しん	7～14日 （3～60日）	経口		病状により医師において 感染のおそれがないと 認められるまで	
	パラチフス	持続する発熱、発しん	1～10日	経口			
	りゅうこうせいじかかくけつまくえん 流行性角結膜炎 （はやり目）	結膜充血、まぶたの腫れ、 異物感、流涙、めやに	2～14日	接 触	ウイルス排出は、初期数日 が最も多いが、その後、便からは 数週間～数か月続くこともある		角膜炎後の角膜混濁により視力障害を 残す可能性がある ※医師の許可があるまで、プールには 入らない ※タオル等を共用しない
	きゅうせいしゅうけつせいでいぢよう 急性出血性結膜炎 （アポロ病）	結膜出血、結膜充血、 まぶたの腫れ、異物感、 流涙、めやに	1～3日	接 触	ウイルス排出は、 結膜擦過物から1～2週間		※医師の許可があるまで、プールには 入らない ※タオル等を共用しない
その他の感染症（第三種の感染症として扱う場合もある主な感染症の例）	かんせんせいじょうえん 感染性胃腸炎 （ノロウイルス感染症 ロタウイルス感染症等）	嘔吐、下痢	ノロウイルス： 12～48時間 ロタウイルス： 1～3日	飛沫 接触 経口	感染力は急性期が最も強く、 便中にウイルスが3週間以上 排出されることもある		脱水に注意 下痢・嘔吐症状が軽減した後、全身状態の 良い者は登校可能（排便後の始末、手洗 いを励行）
	かんせんしやう マイコプラズマ感染症	咳、発熱、頭痛	主に2～3週間 （1～4週間）	飛沫 接触	症状のある間がピークで あるが、保菌は数週～ 数か月間持続する		症状が改善し、全身状態の良い者は 登校可能
	りゅうれんきんかんせんしやう 溶連菌感染症	発熱、のどの痛み・腫れ、 ぶつぶつのある赤い舌、発しん とびひ（伝染性膿痂疹の欄を参照）	2～5日	飛沫 接触	適切な抗菌薬療法開始後 24時間以内に感染力は 消失する		リウマチ熱や腎炎の合併症に注意 適切な抗菌薬療法開始後24時間 以内に感染力は消失するため、それ 以降登校可能
	でんせんせいこうはん 伝染性紅斑 （りんご病）	かぜ様症状の後に、両頬と 手足に網目状の赤い発しん	4～14日 （4～21日）	主として 飛沫	かぜ様症状出現から 発しんが出現するまで		発しんのみで全身状態の良い者は 登校可能
	かんせんしやう RSウイルス感染症	発熱、鼻汁、咳、 「ゼイゼイ」「ヒューヒュー」という 呼吸音	4～6日 （2～8日）	飛沫 接触			発熱・咳などの症状が安定し、全身 状態の良い者は登校可能（手洗いを 励行）
	てあしくちびやう 手足口病	発熱（1～3日）、 口内に水疱ができ痛む、 水疱は手足やお尻にもできる	3～6日	飛沫 接触 経口	ウイルス排出は、 咳や鼻汁から1～2週間、 便からは数週～数か月間		全身状態が安定している場合は登校 可能（手洗い（特に排便後）を励行）
	へるばんぎやう ヘルパンギーナ	突然の発熱（39℃以上）、 口内に水疱・潰瘍ができて痛む	3～6日	飛沫 接触 経口	ウイルス排出は、 咳や鼻汁から1～2週間、 便からは数週～数か月間		全身状態が安定している場合は登校 可能（手洗い（特に排便後）を励行）
	でんせんせいじやうかん 伝染性膿痂疹 （とびひ）	水疱や膿疱（うみ）が破れて ただれ、かさぶたをつくる かゆみ	2～10日 （長期の場合も ある）	接 触	かさぶたにも感染力が 残っている		※医師の許可があるまで、プールには 入らない ※傷に直接触らない
	でんせんせいなんぞくしや 伝染性軟腫腫 （水いぼ）	2～5mmのいぼが、からだ・ 手足にできる	主に2～7週 （6か月ものこ もある）	接 触	回復までに6～12か月、 時に数年を要する	通常出席停止の 必要はないと 考えられる感染症 の例	プールや水泳で、直接肌が触れると 感染するため注意 ※タオル・ビート板等を共用しない
	しやう アタマジラミ症	一般に無症状、 吸血部位にかゆみ	産卵からふ化まで ：10～14日 成虫まで：2週間	接 触	シラミと卵がいなくなるまで		発見した場合、学校薬剤師の指示 のもと、早期駆除を行う ※タオル・くし・帽子等を共用しな い

*参考文献：「学校において予防すべき感染症の解説」公益財団法人 日本学校保健会 <平成30(2018)年3月発行>